人文科教育研究　29　2002年　pp. 91－97

日本語イントネーション研究

柳　　京子

1．はじめに

言語における意志疎通は人間の内奥の主体と知的思考を表に押し出すことにあるが，イントネーションはそうした表出がもっともスムーズに行なわれるように促進し，かつまた相手の心情にも訴える情操面を適度に随伴させる。要するに，イントネーションは，人間の内奥に深く関係し，内奥の無限を，相手に対してよりよく具体化し，よくわかるように有限化する重要な一連の言語行為であると考えられる。

さらに，イントネーションは古くから音声学者や外国語教育者によって言語，純言語信号としての働き，およびその重要性について指摘されてきており，多くの学者によってその研究が進められてきた。しかしながら，その研究の発展状況は必ずしも満足のいくものではないといえる。

なぜ，イントネーションの研究が他の言語学上の諸事実の研究に比して遅れているかについて，竹蓋（1976）[1]は次のように述べている。

「第一に研究対象としてのイントネーションの複雑さをあげねばならない。しかし，皮肉なことにこの非常に重要な，そして複雑な音声信号を一部の言語学者，音声学者があまり重要でない，そして真剣な研究にも値しない自然な生得的なものであると誤解してきたことも大きな要因となっているといわねばなるまい。」

こういう面を考えてみるとき，言語教育におけるイントネーションの問題は今後，さらに重視する必要があるといえる。

2．日本語イントネーション

イントネーションを研究するということは，言語の研究全体の中でどういう立場に立つということになるであろうか。

服部（1951）[2]はイントネーションに部分的にせよ体系的な側面があることを指摘し，言語研究を次の三つの平面，すなわち①発話〈utterance〉（現実のできごと），②文〈sentence〉（第１段階の抽象）③形式〈form〉（第２段階の抽象）に区別してイントネーションを②文〈sentence〉のレベルにかかわる現象であるとみなした。

さらに，田中他（1978）[3]とファッジ（1970）[4]もイントネーションの特徴を一つの音節や語に限定せずに，文までを含めた広い範囲で使われるものであるとしている。本論文でも，基本的にはこの立場に立って考察を進めていくことにする。

国立国語研究所報告23（1963）[5]では，独話の共通資料のイントネーションを広汎に分析調査し

ている。すなわち，話しことばの文型の中で，イントネーションが果たす役割について，そこにどのように関与しているのかについての調査が行なわれている。この分析結果として，イントネーションは話しことばの文型に直接的，積極的にかかわり合いを持つことは少ないけれども，間接的，消極的なかかわり合いをつねに持つことが示されている。

しかし，少なくとも外国人（日本語を母語としない人）が日本語を学習するときには，それとは別の観点からイントネーションをとらえなければならない。一般的に日本の英語の専門家達は，よく英語に比べて日本語のイントネーションはほとんど存在しないと言っている。もちろん，英語と日本語を比較対照するならば，このようなことは言えるかもしれない。しかし，日本語を他の言語と比べたとき，たとえば，韓国語と比べた場合には日本語のイントネーションはかなり重要な要素となってくる。

イントネーションは，種類別に発話に伴う特殊な感情によって現れる，特殊な感情的音調と，特別な感情が働かない場合にも，おのずから備わっている，特定の論理的音調とに分けることができる。ここでは，後者である論理的音調をその研究対象とする。

一方，イントネーションの物理的な面による定義では，イントネーションとは，喉頭制御による基本周波数の時間的変化であるとされる。このような定義は，イントネーションが談話の中に生起することにより，高低，ピッチ感覚などが付随し，ピッチの卓立に伴い意味や情操面が付与されてくるため，多様な様態がかえってその定義を困難にしているように思われる。

しかし，なぜ日本語のイントネーション論が依然として，いまも紛糾しているのだろうか。これについて今石（1992）[6]は，「アクセントはアクセントの核によって型を作り，イントネーションは基本周波数などによってピッチ曲線の型を作るものであるとし，前者をアクセント型と呼び，後者を抑揚型と呼ぶことに起因しているのではないか」と述べている。

たとえば，アクセント型を知るため，時間軸上に単語的ピッチ曲線の型を作るのである。これを繰り返しながら核を知覚して，アクセント型を推定する。あくまでもアクセント型の推定の手段であるが，これは以上のような手段しかとりえない唯一の手段ということになる。

これに対してイントネーションは，時間軸上におけるピッチ曲線の型，または音程であるとされている。まさに音程の変化そのものであるといえよう。イントネーションの何かを推定するというような手段ではない。しかしながら，ここで問題となるのは，手段であるか否かがいつのまにか，同一次元における時間軸上のことになって混同されたり，しかも，それがひとり歩きをするようになっているといった現状である。

したがって，イントネーションがアクセント基盤の上に成立する音声行為であるということについては否定しえないが，イントネーションのイントネーションたるゆえんや独自性は，あくまでも時間軸上での音程の変化にあるということができる。このような面について今石（1992）[7]は，次のように述べている。「イントネーションを音程調節の推移であると規定したとき，「へ」の字から次の「へ」の字へと高さが推移する形式をイントネーション形式と命名することができる。」

さらに，音程の高さが大から小へと推移する形式をイントネーションの基本的形式，これとは反対に，音程の高さが小から大へ推移する形式を変則的規則と定めた。抑揚形の音程と持続時間軸の関係についてみてみると，イントネーションの基本的形式では，話部上の音程と持続時間の関係は反対関係にあることが示される。

すなわち，音程が高い場合には，持続時間が短くなる傾向にあり，音程が低い場合には，反対に持続時間が長くなるといった傾向が認められる。イントネーションの変則的な形式では，話部上の音程と持続時間の関係が長くなる傾向が認められる。

とくに，談話のイントネーションにおいては，いろいろな場合が想定できるが，結局は，基本的形式と変則的形式のバリエーションで，それが種々の環境下で複雑な関わり合いをみせていると考えることもできる。

3．韓国人における日本語イントネーションについて

日本語教育，韓国語教育における音声教育は，これまでは，おもに単音のミニマル．ペアを中心に行ってきたというのが現状である。しかし，これからはアクセント，イントネーションなどの超文節要素（プロソディ）をも利用した音声教育ができるようにしなければならない。

いままで，韓国人に対する日本語の発音矯正で主に取られていた方法は，長母音，有声/無声の対立，特殊モーラ，ザ行音，タ行音などの単音が主体をなしてきた。しかし，実は，これらのことも重要ではあるが，より日本語らしい発話をするという点では，アクセント．イントネーションのほうも劣らず重要なものである。

前田（1997）[9]は，韓国語を母語とする日本語学習者に対する教育と研究の今後の課題として，次の三つの点について述べている。

①高校の日本語教育の変化に如何に対応するか。
②教授法に関する情報をどう提供するか。
③音声，特にアクセント，イントネーション教育をどうするか。

この中で第３番目の問題について，韓国語母語話者と日本語母語話者との日本語によるコミュニケーション活動においては，韓国語の干渉に基づいた問題はいくつもある。そのなかでも，アクセントやイントネーションに関しては，とくにコミュニケーションの面からみたときに，感情面で決して小さくない誤解を生む危険性をもっていると思われる。2000年代になってこの方面の教育の重要性に対する認識が高まり研究も増えている。

しかし，現在の韓国での日本語音声研究は，まだ韓国語の干渉を証明する段階から遠く離れている。今後，この方面での音声指導法についての研究の進展が待たれる。本研究ではこのような問題点を踏まえた上で，研究を進めて行くことにする。

柳（1986）[10]は，韓国語を母語とする日本語学習者の超分節要素（Suprasegmentals）について

の調査結果の分析で，日本語の不自然さは超文節要素のなかでも，おもにイントネーションに基づくところがもっとも多く，続いて単音発音，アクセントの順であることを明らかにした。しかし，ここで注目すべきことは，日本語の不自然さがイントネーションに非常に大きくかかわっていることである。したがって，今後の韓国における日本語音声教育の方法改善の上では，とくにイントネーション研究と教育をもっとも重視すべきである。

また，谷口（1990）[11]は，韓国語を母語とする日本語学習者が発話した日本語の韻律を分析し，文または句の単位にかかる韻律の全体的傾向について，次のような指摘をしている。

①フレージングと持続時間については，韓国語話者の発話では一つの文中で文節毎にピッチの山ができ，その文節の間にポーズが置かれるため，持続時間も長くなる傾向がある。
②周波数域の幅の広さについては，韓国語話者の発話では全体的に周波数域の幅が狭く上下の変化が少ない。
③疑問文のイントネーションについては，上昇のイントネーションはだいたい安定しているが，中に文末の「か」のピッチがやや極端に上がり持続も長すぎるものがあった。
④アクセントについては，文末のイントネーションとの関わりにおいて，イントネーションをかぶせることによってアクセントが影響を受け，その位置が不安定になる。

まえにも述べているように，韓国での日本語音声教育のなかでイントネーションの指導は，ほとんどなされてないのが現状である。したがって，谷口の分析の結果にも明らかになったが，韓国語を母語とする日本語学習者においてイントネーションは，一般的に日本語の能力が高くなるにつれて自然に習得できるものではなく，学習の初期の段階から体系的な学習・指導が必要である。

土岐（1990）[12]は，韓国語のイントネーションに見られる特徴について，次のように指摘している。

①上昇イントネーションについては，全体が低めで，末尾の音節が長い。上昇の仕方がもっとも急激で強い。
②非上昇イントネーションについては，文末は平らであるが弱くはない。文節末・文末に高→低の変化が聞かれる。
③下降イントネーションについては，全体的にゆっくりですこし高い。末尾が長く，下降する。

この韓国語イントネーションの特徴をみると，谷口が指摘した韓国人にみられる韻律の全体的な傾向は，母語のイントネーションの影響が非常に大きいと思われる。

いままで述べてきた，韓国での日本語音声教育の現状や問題点を踏まえた上で，以下では，韓国人における日本語イントネーション指導の一方案を提示することにする。

4．韓国人における日本語イントネーション指導の一方案

4.1　調査目的と方法

祥明大学校の「日音声学」授業で，日本語発音の習得上での問題点について，試験的な調査を行った。今回の調査を行った時期は1997年から2000年（毎年３月－６月中旬）までである。

おもに，「日音声学」の受講生（30名）を対象にした。対象学生は全員が韓国語を母語とする日本語専攻の３年生である。

この「日音声学」の授業をうけた学生たちは全員が，基礎的な日本語の関連の授業を受けたことがあるので，文法や発音に関しての知識を，ある程度は有している。もちろん，日本語の実力については，個人差があると思われる。

調査の方法は，「日音声学」授業の終了後に，とくにイントネーションに基づいて作成した資料を３回に分けて読ませて，それを録音した。その録音した資料の分析は筆者と日本人の先生が行った。その調査分析の結果からでも，韓国語を母語とする日本語の学習者には，イントネーション感覚の習得が「自然な日本語の発音」に大きく関与していることが確認された。

この授業を通した調査では，受講生に共通する発音の習得上の問題点として，正しい拍のリズム，自然なイントネーション，正しいアクセントが実現されていないことが明らかになった。この傾向は前にも述べたように，韓国語を母語とする日本語学習者における，日本語の音声教育での方向づけとほぼ一致することが確認された。

この調査は，今後の日本語の発音教育への応用調査にもなるものであるが，この「音声学」授業は正規のカリキュラム（３単位で週３時間ずつ12週間）に含まれるものであり，人数も多く，包括的な調査であった。しかし，韓国語を母語とする日本語学習者が発話した日本語の韻律を分析した，谷口の研究でも明らかとなったように，韓国では日本語イントネーションについての音声教育は，ほとんどなされてないのが現状であるということが確認できた。したがって，本研究での調査はある程度，資料的な価値を有するものであると考えられる。

4.2　調査結果

この調査結果では，韓国語を母語とする日本語学習者のイントネーションのなかで，最も不自然さにかかわっていると思うのは，日本語の下降調のイントネーションに伴う文末の声の弛緩であった。それはイントネーションが上がるところで下がったり，またはその逆だったりして，話者の意志でイントネーションを使いこなすことができなかった。

また，上がるときと下がるときが滑らかでなく，唐突な印象を与える傾向があった。これは文，あるいは述部の全体のイントネーションを無視して，文末部のみを上げようとしたり，下げようとするからであると考えられる。

とくに，イントネーションが自然にできないあいさつ文の表現では，単音などの発音のあやまりがもっと目立つように聞こえた。

ここでは，今まで述べできた韓国語を母語とする日本語学習者のイントネーションの問題点と

調査の結果に基づいての指導法を述べてみる。言調聴覚法は言語活動における聴覚の機能や聞き取りの法則性を研究分野とする言調聴覚論[13]を外国語習得に応用した方法であるが，この方法を導入することにより，韓国語を母語とする日本語学習者における，より効果的な指導ができる一方案を提示する。

文レベルの音調の練習のためには，アクセントのほかにイントネーションを考慮する必要が生じてくる。これまでの実践では，あいさつ表現と短い肯定文の文末の下降調のイントネーションを扱ったものが多くみられる。文末のイントネーションが下降するということは，発話の日本語らしさを生み出す上で非常に重要である。このことはまえにも述べたように，指導実践を通して再確認されてきた[14]。

実際に，日本語の文音調は文末に向かって徐々に弱くなっていく傾向があり，弱まって聞こえ始めるのが文末の拍よりも早めに感じられる。そこで，この文末のイントネーションの下降に伴って，それ以前の位置から音が弱まっていく過程を知覚することがもっとも重要となっている。

ここで注目すべきことは，アクセントとイントネーションの関係である。たとえば「おはようございます」というあいさつ文は，「マ」と「ス」のあいだにアクセントの下降がくるが，イントネーションの下降に伴う音の弱まりは「ザイ」のあたりからはじまるという聴覚印象がある。

以下では，今まで述べてきた問題点を踏まえた上で，おもに音調聴覚法に基づいた，韓国語を母語とする日本語学習者に対するイントネーション指導法について述べてみる。

①強制のくる位置におくことにより，目標音の緊張度を高める。
②上昇イントネーションを利用して，目標音の緊張度および閉音性を助長する。
③下降イントネーションを用いて，目標音の緊張度を低めて開音性を導きだす。

このような指導法に基づいて，日本語の自然なイントネーション習得を目指して，徹底して集中的な指導を行うことは，これからの韓国語を母語とする日本語学習者の音声教育の中でとても重要である。

5．おわりに

本研究のなかで言調聴覚法を日本語イントネーション教育に導入したのは，この方法が単音から音調に至る，音声の生成習得全体に対し，統一した体系的な音声教育を研究する上で，現在のところもっとも有効な指導方法であると判断するためである。

従来の音声指導では，音韻論的な示差的な特徴を認識させる形態の指導法が中心になっていたといえる。しかし，音韻論的な記述に依存する方法では，音調レベルにおける日本語音声の特徴のかなりの部分，単音間．単音と音調間の環境差による発音の難易などが，指導の対象にならないままになってしまう可能性が大きい。

また，最小単位での示差的な特徴の習得には一定の効果を持つといえるが，「全体として日本語

らしい」音声特徴の習得には，あまり大きな効果は期待できないのである。

本研究における今後の課題は，韓国人における言調聴覚法に基づいた超分節要素の音響音声学的な実験を行い，その分析を通して，日本語音声教育の指導法を発展させることである。

注

(1) 竹蓋幸生（1976）「イントネーション信号の聴覚による認識．分析と電子機器，コンピュータによる分析」『音声の研究』第17，日本音声学会，90頁

(2) 服部四郎（1951）「メンタリズムメカニズムか」『言語研究』第19,20号併合

(3) 田中春美（1978）『言語学のすすめ』大修館，94頁

(4) ファッジ．E．C．(1970)「音韻論」Lions, J．編著，田中春美（1973）『現代の言語学』上，大修館

(5) 国立国語研究所報告 23（1963）『話し言葉の文型(2)独話資料による研究』国立国語研究所

(6) 今石元久（1992）「日本語の音声—実験音声学的立場から—」『日本語学』前田秀樹他6人，和泉書院，42－44頁

(7) 注(6)と同書　57頁

(8) 前田網紀（1997）「朝鮮語を母語とする日本語学習者に対する教育研究」115－116頁，国立国語研究所『日本語と朝鮮語』上，くろしお出版

(9) 柳京子（1986）「韓国人にみられる日本語の言いあやまり—日本語の超分節要素（supura-segmenntals）について—」『人文科教育研究』13，人文科教育学会，63－74頁

(10) 谷口聡人（1990）「韓国語を母語とする学習者の韻律的傾向について」『「日本語音声」研究報告3，研究成果中間報告書　1990　総括班』62－64頁

(11) 土岐　哲（1990）「中国人．韓国人．アメリカ人による日本語のイントネーションとプロミネンス」『講座日本語と日本語教育第3巻　日本語の音声．音韻　下』，明治書院，258－287頁

(12) 言調聴覚法は言調聴覚論に基づいて行う言語習得である。（言調聴覚論－人間が言語音をどのように聞き取るか，また人間の聴覚にみられる法則性と機能に関する理論である。）

(13) 脇誠一（1997）『日本語と朝鮮語』上，くろしお出版，31頁